

Jayaratne, Toby Epstein and Abigail J. Stewart, 2008, "Quantitative and Qualitative Methods in the Social Sciences: Current Feminist Issues and Practical Strategies," Jagger, Alison M.ed., *Just Methods: An Interdisciplinary Feminist Reader*, Routledge, 44-57.

トビー・エプスタイン・ジャヤラトナとアビゲイル・J・スチュワート, 2008, 「社会科学における定量的手法と定性的手法——現在のフェミニスト的課題と実践的戦略」

※ ( ) の数字はページ数を、[]内は原文を表す。

### レジュメ作成者による紹介文

本稿は、フェミニスト方法論を網羅的にカバーした著作として評判の高い *Just Methods: An Interdisciplinary Feminist Reader* (Alison M. Jagger 編、2008 年) に収録されている。本稿は、フェミニストによって提起されてきた定量的研究と定性的研究の使い分けに関する議論を概観したのち、研究にフェミニスト的視点を導入するための戦略を提示している。

## 1. フェミニスト方法論に関する議論 (44-48)

### ■フェミニスト的批評 (44-46)

- フェミニストの方法論に関する議論は、伝統的な定量的研究に対する批判から始まった。
  - DuBois は、「伝統的な科学や理論では、文字通り女性を見ることはできない」(DuBois 1983: 110) と述べ、定量的研究の問題点を簡潔に定義している。
  - 定量的研究における具体的な批判の対象は次のようなものであった。
    - ◇ 性差別的でエリート主義的な研究テーマの選択。
    - ◇ 調査対象者を男性に限定するといった偏った研究デザイン。
    - ◇ 研究者と対象者の間の搾取的関係。
    - ◇ 実証主義的アプローチに伴う客観性の錯覚。
    - ◇ 調査結果の不適切な解釈や過度の一般化。

### ■フェミニスト的批評の起源 (46)

- 伝統的な定量的研究に対するフェミニストによる具体的な批判は、少なくとも 2 つの起源に由来する。
  - 第 1 の批判の起源は政治的なもので、既存の方法論が性差別、人種差別、そしてエリート主義的な態度や実践を支持し、それゆえ人々の生活に悪影響を及ぼすという懸念である。
  - 第 2 の起源は哲学的なもので、科学を価値中立なものとして捉える実証主義に対する拒絶に基づいている (Wittig 1985)。

### ■定性的手法に対するフェミニストの支持 (46-47)

- こうした批判を受け、一部のフェミニスト研究者は、フェミニスト的価値観に合致する方法論を開発する必要性を認識した (Mies 1983)。
  - ・ 定量的手法が女性の経験を排除してきたという疑念は、定性的手法に対する大きな期待へとつながった。そして定性的手法は、女性が自分の経験を自分の言葉で表現することを可能にする手法として肯定的に受け止められた。
    - ◇ 例えば、Dorothy Smith は、社会科学における手法は、調査対象者が世界を経験したままに記述することを可能にしなければならないと論じている (Smith 1974, 1987)。
- しかし、フェミニスト研究が特に定性的手法を用いる時、学术界の主流派によって強い否定的反応が示される (Cook and Fonow 1984; DuBois 1983; Reinhartz 1979)。
  - ・ なぜなら、その研究が「非科学的」あるいは政治的に動機づけられており、したがってあからさまな偏見に基づくものとして認識されるためである。

### ■包括的なフェミニストの視点 (46-48)

- 定量的研究への批判も存在する一方、近年では定性的手法と定量的手法の両方を適切に利用するための方法論が模索されている。
  - ・ ここで強調されるのは、特定の研究課題に最も適切に答えることができる手法を用いることである。
  - ・ さらに、異なる手法を組み合わせる「トライアングレーション」(Denzin 1978; Jick 1979) によって、研究者は「より完全で、全体的で、文脈に即した描写を捉える」ことができるという考えも受け入れられている (Jick 1979: 603)。

## 2. フェミニスト方法論における現在の問題点 (48-53)

- フェミニストのコミュニティにおいて、定性的手法と同様に定量的手法は正当な研究手法であり、研究課題との適合性に基づいて手法が選択されるべきであるという合意形成がなされている。
- 一方で議論すべき3つの論点が残されている。第1に、「定量的」、「定性的」、「手法」、「方法論」という用語の定義の難しさである。第2に、本質主義的な立場に立脚することが、女性研究者をステレオタイプ化することにつながるという危険である。第3に、客観性／主観性に関する認識論的な問題である。

### ■定義上の問題 (48-49)

- フェミニスト方法論で使用されるいくつかの用語は、暗黙的または明示的に異なる定義を持っており、その結果、いくつかの混乱を引き起こしている。

- この混乱は、特に「手法」と「方法論」、「定量的」プロセスと「定性的」プロセスの区別において顕著である。
- Sandra Harding は、用語間の区別を次のように提案している。彼女は、「手法」を研究の過程で用いられる特定の手続き (例：インタビュー)、「方法論」を研究の実施方法に関する理論、または研究の実施方法や理論の適用方法に関する原則 (例：調査研究の方法論や実験方法)、「認識論」を知識に関する理論 (例：様々な命題の真理値[truth-value]を確立しようとする「科学的方法」) として位置付けている (Harding 1987)。

### ■問題を「本質化」する——「女性の研究[Women's Research]」とは何か？ (49-51)

- 多くの研究者たちは、「異なる声[the different voice]」の視点に依拠する形で、定量的手法を誤った形で批判している。
  - Carol Gilligan の *In a Different Voice* (1982) に代表されるこの視点は、自己を他者との区別と分離の観点から定義する男性の声と、自己を他者とのつながりと関係の観点から定義する女性の声との違いを強調するものである。
    - ◇ フェミニストの方法論に関する数多くの研究は、このような男女の違いに関する考え方を、定量的・定性的手法に関する議論に接続させ、女性の声は定性的であり、男性の声は定量的であると結論づける (Davis 1985; Sheuneman 1986)。
    - ◇ さらにこの考え方は、定性的研究と定量的研究の違いを強調し、前者を主観的、関連的、記述的、後者を客観的、無関係、表層的としてみなす。
  - 本質主義の立場に立つ人々は、女性にとって重要な問題を研究する能力は、男性よりも女性の方が高いと考える。
    - ◇ M. Mies によれば、女性は個人的に抑圧を経験しているため、「搾取されている集団の包括的な研究をするために、男性の対応者よりも優れた能力を持っている」 (Mies 1983: 121)。
- しかし本質主義の立場には、経験的な裏付けがないことに加え、いくつかの問題点が存在する。
  - 第 1 に、理想と現実を混同しており、その知見は希望的観測に過ぎない。つまり、本質主義的な信念はフェミニストの価値観と一致しているように見えるが、実際には何の根拠もない可能性がある。
  - 第 2 に、すべての女性について本質主義的な見解を持つことは、すべての女性研究者を定性的研究者としてステレオタイプ化することにつながる。

- 一方で、高度な数学的・統計的スキルは、以下の理由からフェミニスト研究者にとって重要である。
  - ・ 第1に、フェミニスト研究者は、そのようなスキルを使用した研究を評価し批評するために、十分な統計的あるいは数学的知識を得ることが重要である。反フェミニスト的なメッセージを持つ研究が数多く存在する中で、フェミニスト研究者がそのような研究の背後にある手法を理解することは、説得力のある批判を展開するために不可欠である。
  - ・ 第2に、リサーチ・デザイン、サンプル選択、データ解釈、知見の一般化などの研究手続きにおいて、数学的・統計的スキルが機能するという基本的な理解がなければ、定性的・定量的研究の両方において、誤解を招くような結果をもたらす可能性がある。不正確な結果よりも有害なのは、フェミニストの価値観によって動機づけられた劣悪な研究の一例が槍玉に挙げられ、すべてのフェミニスト研究が政治的動機に基づく偏ったものとステレオタイプ化される危険性である。

#### ■客観性の問題——何が問題なのか？ (51-52)

- 定量的研究に対するフェミニスト的な批判でよく見られるテーマは、「科学的客観性」に対する研究者の強迫観念がもたらす負の結果である。フェミニストによる批判は、いくつかの重要なポイントに焦点を当てている。
  - ① 一見「客観的」な科学は、その目的や効果においてしばしば性差別的であった。
  - ② 客観性の美化は、研究者と研究対象者の間に上下関係や支配関係を課してきた。
  - ③ 客観性の理想化は、個人的主観に基づく知識を科学から排除し、その知識を「科学」の外に置くことになった。
- 一部のフェミニストにとって、「真にフェミニスト的な社会科学」は「女性の現実に対する女性の経験から」生まれる (Stanley and Wise 1983; Smith 1974,1987)。
  - ・ この視点は、研究過程における客観性の概念の排除を意味するとの見方もある。とはいえ、現代のフェミニストの多くが、客観性を目標として放棄すべきだという考え方を否定していることは明らかである。
  - ・ すなわち、特定の方法と手順を用いることが自動的に客観性を与えるわけではないことと同様に、個人的な主観的経験の分析を含むことが客観性を排除するわけではないことが、フェミニストの方法論において次第に認識されるようになってきている。

#### 3. 方法論に対するフェミニストの視点 (53)

- 近年のフェミニスト方法論に関する文献の多くは、フェミニストの価値観と合致する単一の規定された方法や研究手法のセットは存在し得ないという点で一致している。

- ・ 「フェミニスト革命への道は『1つ』しかなく、『真のフェミニスト的』研究は1種類しかないという考え方は、これまでの男性に偏った研究と同様に制限的で不快である」(Stanley and Wise 1983: 26)。

#### 4. 社会科学的研究においてフェミニスト的視点を実践的に導入するための戦略 (53-55)

- ・ フェミニスト研究者は、フェミニスト的視点を導入するための現実的で実用的な戦略を開発しなければならない。
    - ・ 以下の具体的な手順は、そのような戦略の例である。
- ① 研究テーマや問題を選択する際には、その研究が女性の生活にどのように役立つ可能性があるのか、そのような影響を与えるために必要な情報は何かを問う必要がある。
  - ② 研究を計画する際には、問いに対して適切で、かつ特定の聴衆に説得力のある回答を可能にする手法を提案する必要がある。
  - ③ 定性的手法を用いる場合、代表性の低さや過度の一般化といった方法論的な問題に注意しなければならない。また、定量的手法を用いる場合は、フェミニストの価値観を意識的かつ積極的に取り入れる必要がある。
  - ④ 可能な限り、定量的手法と定性的手法を組み合わせた研究デザインを用いるべきである。このアプローチは「混合法」と呼ばれ、一方の手法の短所を他方の手法の長所で相殺する方法として、多くの著者によって提唱されている (Denzin 1978; Jick 1979)。
  - ⑤ 研究方法が定量的であれ定性的であれ、バイアスフリーあるいはセックスフェアであることが重要である。バイアスを最小化する方法の一例として、K. E. Grady (1981) を参照されたい。
  - ⑥ 私たちは、質の高い研究を行うために時間と労力をかけるべきである。
  - ⑦ 結果を解釈するときは常に、その解釈が、女性の生活の変化に対して何を示唆するのかを問うべきである。
  - ⑧ 調査結果の政治的分析は常に試みるべきである。研究結果が示唆する政策変更が、女性の生活にどのようなプラスの影響を与えるのかを探る努力をすべきである。
  - ⑨ 最後に、研究成果の普及に努めるべきである。